

第6回高等学校改革プラン推進委員会（第一推進委員会）議事録

1 日時 平成17年8月25日（木）午前9時00分～午後0時00分

2 場所 長野県庁西庁舎 401会議室

3 出席委員

中村 正行委員長	若麻績 享則委員
森野 貞雄副委員長	清水 保委員
青木 一委員	坂口 昌夫委員
中沢 一委員	小山 壽一委員
小山 元彦委員	宮本 精一委員
塚田 芳樹委員	丸山 稔委員

4 開会

（三澤教育支援主事）

皆さま、おはようございます。

それでは定刻となりましたので、始めさせていただきたいと思いますが、よろしくお願いいたします。

（中村委員長）

おはようございます。

第6回の高等学校改革プラン推進委員会を開催いたします。前回は、魅力づくりに関するところの基本的な、あるいは根幹的なところをお示しして、総合学科、多部制・単位制の検討を行ってきました。毎回、議論が少しずつ深まっているように思います。

そんな中で、もう少し具体的に議論を進めなければいけないのではないかというご意見をいただきました。その前に再編整備候補案について、具体的に、もう少し詳しく事務局に資料なりに基づいて説明をいただいて、まずそこから入っていこうということでありました。それは今回の推進委員会をお願いするということで、資料等用意していただいています。

それで今日はその資料、それから以前にいただいた資料もありますので、今日はその説明からお願いをしまして、候補案についての議論を進めていきたいと思います。

それでは事務局からご用意いただいた資料説明をお願いしたいと思います。

5 資料説明

高校教育課三澤教育支援主事から資料説明 【説明内容省略】

(中村委員長)

ありがとうございました。

冒頭で申し上げるのを忘れてしまったのですが、各委員さんが地域あるいは高校の同窓会あるいはほかの関係の団体等からいろいろご意見、情報を得ていると思いますので、その紹介を今回も行っていただきたいと思うのですが、まず私のほうで説明したいと思いますが、そのあとで、今日出していただいた資料への質問や議論へ進みたいと思います。

私のところへ、8月18日に長野市教育委員会の立岩教育長さんと、島田教育次長さんお二人でお見えになりまして、候補案に対する長野市教育委員会の分析、検討したこと、疑問点を5枚の資料にまとめて説明をしていかれました。若干数値に疑問の点もありますし、内容についてもう少し分析しなければいけないところがあります。皆さんのお手元には差し上げていないのですが、口頭で内容を説明いたします。

候補案に書かれてあります項目ごとに、数値の分析と考え方を述べられていて、まず中条高校と犀峽高校の統合についてですが、これは長野市内からこちらの高校へ通学する生徒が多いという分析をされていまして、活力と魅力ある学校づくり、効率的な学校運営に生かすためには、一定の生徒数が求められる。

ほとんど再編案に賛同するような形で、まとめられていると思います。統合後を考えると、市内高校の定員枠を広げてもらうことが望ましいというようなことが書かれています。それと南高校と松代高校の統合についてですが、両校とも募集定員を充足しているということで、統合の理由が定かでないということと、それから長野市内の人口動態、定住人口の増加が南部である程度あるとの記載があります。

それから候補案、整備案の中では、長野市南部から北部への通学者が多いというのが理由に挙げられていますが、南部に学校が少ないためであるという反論がされていました。坂城高校の全日制が多部制・単位制に転換されるので、ますます南部でも高校の競争率が激化するおそれがある。こういう反論というか、ご意見を述べられて、長野市の考えを示していく必要があるとまとめられています。

定時制・通信制に関しては、吉田高校定時制戸隠分校の坂城高校への統合については、少人数教育のメリットも否定できないという記述がございますが、戸隠分校の必要性は低いのではないかとのご意見が書かれています。

それから地元で就労しながら、夜間定時制高校に通学する生徒の利便性を勘案すれば、長野高校、長野工業高校の現状維持をするならば坂城高校への通学というのが非常に困難が予想されるので、長野高校、長野工業高校の現状維持どおりにほかも同様にすることが望ましいというようなことが書かれております。

細かな15歳年齢人口の地区別の集計の表などが添付されていますが、若干数字が再編候補案の中で800名というところが、長野市の調査では560という数字になっていたり、数値の解釈等に疑問点ありますので、これを確認してお示しできるようになったら資料を提出したいと思っています。

ほかに、地域の情報等ございましたら、ご紹介をお願いします。

(小山(元)委員)

報告だけさせていただきたいと思います。

資料ありますが、29番に関係するのですが、8月8日に「飯水岳北地区高校の将来を考える会」の総会を行いまして、このところで次のことが出されました。県教委に対しまして、県のほうで指名されている候補案について再考をお願いしたいと。それからもうひとつは地域の考えを大事に反映させて、審議をお願いしたいと。

そういう内容で、地域のほうで今、大事に考えているから、それを大事にまた取り上げていきたいという、そういう内容で、今日また午後にございます、県教委の高校教育課のお立場でおいでいただいて、意見交換をお願いしたいと、そんなようなお話しです。

以上でございます。

(青木委員)

中野市の中では、今、ちょっと動きがみえます新たな出来事は、県のご提案いただいた案に対して白紙撤回であるとか、たまたま小山(元)委員さんからもございましたが再考であるとか、そういうレベルまでまだ地域住民の状況把握が達していない状況であります。

そういう中での具体的な運動目標も、そんなことから定まらないということから、それぞれの学校の同窓会うんぬんではなくて、中野に今課せられた課題は、2つの高校の統廃合をする課題と、その1つに総合学科高校ということでノミネートされたという、この2つが課題として投げられたわけありますので、そのあたりをしっかりと学習をしておかないと、地域としての考えもまとまっていけませんから、大きな提案を投げかけられたのを横目で座しているだけでは地域として、大人として、子どもの選択肢は狭まってしまうことと同時に、新たな選択肢が加わったということですから、正しい学習をしなければいけないということから、あまり同窓会ということではなくて、どちらかというこれから高校に必要であろう中学校、小学校の例えばPTAだったり、例えば学校評議員さんであったり、そういう立場の有志が学習会を開こうという動きをしているところであります。

となると恐らく県教委に対して、本日再編整備候補案の解説・説明をいただいたわけですが、これプラス総合学科の学習をするという資料なり、説明なりをまとめていくのではないかというふうに予測されていますので、そんな状況です。

(中村委員長)

ありがとうございました。

ほかに何かありますか。

(中沢委員)

県のほうの資料については、何かしら意見を述べる機会はあるわけですね。

(中村委員長)

まず、ご質問を受けてからお願いしたいと考えております。

(中沢委員)

そういう形ね。

それではちょっとご説明しておきますが、私は先日群馬県の前橋清陵高校と太田フレックス高校へ行って、半日ずつ勉強してきました。

群馬県の場合は5年余をかけて時間をかけながら、いろいろやってきている。そしてフレックス高校でも、あるいは前橋清陵高校でも、多部制・単位制のような高校は、その地域に5つ6つある中の1つとして転換しているという実情であって、1つの町にあるたった1つの高校をということではないなと、そういう実感を強く持っております。

その点、坂城町は大変でございます。今の説明だと、「しなの鉄道が、しなの鉄道」がと言いますが、そういう観点はおかしいじゃないですか。千曲市あるいは篠ノ井もみなしなの鉄道の交通の便があるにもかかわらずということ、そしてまた定時制がほとんど長野にありながら、それを坂城でというようなお話。

さらにまた地域高校ということで頑張ってきて、地域高校で2校ぐらいだったら地域高校として進んでいくことはあるんだけど、坂城の場合にはどちらかというと160名も満たしているという中でという疑問がありまして、全町的にこういった多部制・単位制については撤回してほしいと、普通高校を軸にした地元高校ということで、こんな特色ある高校ができるということの面での展開をしたいということで、PTAの中で、あるいは同窓会ばかりでなくて、商工会あるいは区長会等を挙げての組織が今、つくられつつある。

そこにおいて、いろいろと皆さんに事情をおかれてきたけど、そういう動きのあることだけを、まず報告しておきます。

(中村委員長)

ありがとうございました。

ほかにございますでしょうか。

また次回、地域の情報がありましたら提供していただいたり、報告をお願いします。またそれを議論の中で生かしていただきたいと思います。

それでは、事務局からご説明いただきました資料1、県立高校再編整備候補案についてご質問がまずありましたら、受けたいと思います。疑問の点等もございましたら、お願いしたいと思います。

(小山(壽)委員)

数字だけの質問ですが、中学卒業者の進学状況だとか、あるいは高等学校の入学状況等が、表になっているのですが、これについては先ほど私立高校も定時制課程の入学者も入っているというお話だったのですが、もうちょっと具体的にそこを教えてもらえますか。

(中村委員長)

事務局、お願いします。

(三澤教育支援主事)

例えば1ページの飯山のところにも表がございますが、飯山第一が99名という合計になっております。この99名の高校進学者の合計には公立全日制、定時制、私立高校へ行った生徒さんについて含んでおります。

例えば「第3区高校」へ20名ですとか、ここは私立高校に行っている生徒さんの数も含まれております。それと「第2区高校」には定時制、中野実業があるわけですが、ここへ行っている生徒さんも含まれているということでもあります。

全体に数字等を見渡していただくのに際しまして、例えば第3区の長野市には私立高校5校がございますが、そういうところへ入学している人数も含めた流出入を見たほうがいいのではないかと資料でございます。

(小山(壽)委員)

そういうことで、逆に言うと自律学校の高等部や、通信制、長野高専については入っていないということですか。

(中村委員長)

事務局、どうでしょうか。

(三澤教育支援主事)

はい。そのとおりでございます。入っておりません。

(丸山委員)

最も大きな前提のところの質問ですが、この資料の中で総数決定基準に基づき27校から21校に再編すべきということがひとつになっています。

検討委員会最終報告での76という総数決定基準というのは、県民アンケートに基づいて5、6の学級が望ましいというのが多かったと。それから3から4というのは、2学級の学校も残すということもできることで、それはここに含まれているので5から6で、その間の5.5で、というのが考えられるということで76というのが出てきたと思うんです。

それを地元のほうで各通学区ごとに、削減校数を出したわけです。それが今度の具体的な名前が出てきたものの候補案に進んでいっているわけで、その大前提の27校を21校にするというところの計算式がよく分からないのです。

それとすごく大事なところで、後で議論をしていただきたいと思います。何か全体的に整備候補案は、6の学校は減らすために何度かどこか6カ所を探すという感じはどういうふうにするのですかというのを、坂城の話や長野南の話は、そういうのを含めたり、あるいは中野の話を含めたりすると、何か無理やり6に直したり、そういう点では本当に27校から21校にするというところの前提の数字がどうなのかということが、よく分からないので、27から21にした計算式はどういう計算式かというのを知りたいです。

(中村委員長)

事務局、27校から21校にするという根拠についての説明をお願いします。

(柳澤教育主幹)

この総数決定基準につきましては、第1回の推進委員会にお願いをしましたときに、検討依頼事項ということで資料をお出ししていたかと思いますが、その中にそれぞれの通学区ごとの再編の校数とか示されていたと思いますけれども、これは平成18年以降31年までの生徒数の推移からその募集予想学級数、これは最終報告書の資料編にも表になって入っております。

その予想学級数を出しまして、基本的には平成18年から平成31年までの平均値を出しまして、そして5.5で割り返すということで、76校という目安が出ております。従いまして、それを第1から第4までの通学区に分けまして、同様な基準で算出したということで、それぞれの通学区に校数を割り当てた、ということであります。

(中村委員長)

丸山委員、よろしいですか。

(丸山委員)

候補案の議論をする中で、また意見を言いたいと思います。

(中村委員長)

ほかにご質問はございますか。

(中沢委員)

すみません、お願いします。

9ページの、坂城高校の入学者の内訳というので、その中での認識なんです、坂城高校の場合には、地元高校ということ、更埴地域の南部ということで坂城中学校、戸倉上山田中学校は地元高校だということになっており、ここから来る人たちは、地元の中学の入学者だという理解をしているわけでございます。

これは歴史的にそうっております。そうしますと、地元からの入学者は42.2%というふうに理解していますが、これについて県教委のほうもそう理解しているということをお聞きしておきたいと思います。

(中村委員長)

事務局、お願いします。

(三澤教育支援主事)

はい。先ほど資料をご説明いたしましたとおり、坂城高校におきまして坂城中学の割合が24.2%、戸倉上山田中学が18%ということで、これを足しますと42.2%ということでございます。

(中沢委員)

地元から 40%来ているという、そういう高校だということで位置付けはいいですね。

(三澤教育支援主事)

はい。またその上には、中学校からの割合も載せてございますが、地元、近接する中学ということでどのくらいが坂城高校へ進学しているかも添えてございます。

(青木委員)

4 ページの再編後のイメージのところの最初の「・」と二つ目の「・」の違いが理解し難いのですが、最初の「・」は何となく分かります。二つ目の「・」は、上とどういうふうに違うのか。特に「中野実業高校の学科と融合的な教育も考えられる」なら分かるのですが、その間に「系列を置くことも考えられる」ということ、その意味がちょっと不明なんです、ちょっとイメージをわかせていただきたいと思います。

(中村委員長)

事務局、お願いします。

(三澤教育支援主事)

「系列」という言葉が入っておりますのは、総合学科高校の場合、多様な選択科目に応じていくわけでございますが、生徒の進路希望ですとか、興味関心等におきまして、系統的な選択ができますように、系列というものを置いております。

その系列のひとつとしまして、農業関連産業に絡めたようなもの、こういうものを置くことが考えられるのではないかと書くさせていただいております。

ちなみに志学館高校につきましては、8 系列がございます。

(中村委員長)

ほかは、よろしいですか。

(塚田委員)

よろしいですか。

先ほど委員長が言われたのですが、私どもは長野市の教育委員会へ行って、数字的なことで乖離しているということで、本日またその資料を見たと思うのですが、また送っていただきたいのですが、というのは生徒数の状況で 3 区、4 区が平成 17 年から 31 年に 767 人減少するという計算をされているのですが、長野市が持ってきたのは 560 人ということで、ここでいわゆる約 200 名の乖離があるのですが、この辺の計算の根拠がどんなところにあるのか教えていただきたいと思います。

(中村委員長)

これは、長野市に聞かないとわからないですね。

(塚田委員)

そうですね。

だから分からなかったら、もし長野市教育委員会とも連絡が取れるのなら、どこでそういう違いが出てきたのか、ちょっと教えていただければと思います。

(中村委員長)

ただしこの資料が、県の教育委員会へ説明がされているのかどうか、これは私には分かりかねますが事務局いかがでしょうか。

(柳澤教育主幹)

今、私どもから出してある数字につきましては、基本的には最終報告書に出ておりますが、最終報告書をお持ちでしたら見ていただければと思います。資料編の P 12 のところに、平成 31 年までのそれぞれの区ごとの中学校卒業生数の予測値が出ておりますが、それが昨年平成 16 年の 5 月 1 日現在でまとめたものでございます。

この数字につきましては、この当時の小学校 1 年生までは学校基本調査に基づいております。それからそれ以下平成 31 年までの子どもの数につきましては、県情報政策課からいただいた、公開されております数字を基にして作られております。

従いまして、この数字を基にして今の候補案、それから候補案の解説、これが作られておりますので、根拠はそういうことでご覧いただきたいと思います。

ちなみに長野市からの説明はございません。

(塚田委員)

長野市はこれを根拠として言っているもので、もしそういうそちらが直接長野市に問い合わせができるのであれば確認をお願いしたいと思いますし、できないのであれば私のほうでどういうことが聞いて、また県のほうへお示しをしますが。

(柳澤教育主幹)

例えば今年の 17 年度の 5 月 1 日現在で統計を取りますと、16 年度の 5 月 1 日現在とはやはり数値が微妙にずれてまいります。そしてまた特にこの 31 年の数値につきましては、昨年の 4 月 1 日現在で 0 歳児ということで統計を取るわけでありましたが、それが今年 17 年の 4 月になりますと満 1 歳児という統計で 4 月 1 日現在で取るわけです。

この 0 歳児、そして翌年 1 歳児の差は、この全体の統計が例えば 3 月の 20 日以降にお生まれになった方で、4 月 1 日までに届け出が出ていないというような違いが出てまいりまして、毎年大体 1 日に 50～60 人生まれるとしますと 10 日間で 600 人くらいとなり、このような違いの誤差はどうしても出てくるのかなという部分はございますが、詳しいことは長野市のほうから伺っておりませんので、少なくとも今申し上げましたように、私もこの表の数値を基にお出ししたと、こういうことでございます。

(中村委員長)

この数値については確認できますか。

(柳澤教育主幹)

長野市に確認して、またお示ししたいと思います。

(中村委員長)

ほかにございますか。

(若麻績委員)

長野市の部分の、私どももよくお聞きしております。

そのときも聞いたのですが、平成 17 年 4 月 1 日の数字であるということ。つまり実数にかなり近いというようなことをお話しされていました。長野市だけの問題でいきますというより、これを平成 16 年 5 月 1 日の推定学級数ということで、すべてこれで動かすのか、実際実数に基づいた数を各地でも弾き出していく必要があるのかどうかというふうに、具体的な数値では問題が出ていたと思いますので、それについてはご返答をお願いしたいと思います。

(中村委員長)

ご質問を伺いますが、いかがですか。

(小山 (元) 委員)

5 ページでお聞きしたいのですが、私の認識がどうも間違っていたようです。

中条高校と犀峡高校の統合ということで、実は中条中学から犀峡高校へ行く子どもたち、それから犀峡のほうから中条高校へ来るという子どもたちもいるから、そこで両方の高校を統合すると考えていたのは間違っていたようです。

今日示したいただいた資料をいただきますと、やはり沢が違うからそれぞれ長野、千曲市のほうへ出ていくのが多いわけですが、それを見ていったときに、5 ページの一番下から 3 行に書かれているのですが、「中条高校や犀峡高校へ通学している生徒は、長野市内の中学を卒業した生徒の割合が多い」。確かに上の数字を見ると、中条中学を卒業したのは犀峡高校へ誰も行っていませんし、その反対もないわけです。

そうするといわゆる地元の高校でも、約半数ぐらいの中学からは入学しておりますが、大半は長野市内のほうから通っていると。そういうことを大事にするので、中条高校、犀峡高校の場合では、県教委の立場とすれば犀峡高校のほうへまとめていくのだと、統合していきたいというそういう考えでいいわけですね。

その点ちょっと、中学の進学指導との関係もあると思いますので、最初にお聞きしたいと思います。

(中村委員長)

事務局、お願いします。

(三澤教育支援主事)

解説の中でこの点につきましては、6 ページの【総括】の部分にありますが、統合として校舎・校地の候補として犀峡高校ということを記述しておりますが、これは地理的な配置として長野市内への通学がより不便である信州新町の生徒を考慮したということであり、現在、長野市からの生徒が多いというのは分かっているわけですが、もっと遠くから来るようになってしまう生徒さんも現状の犀峡高校はありますので、そういうものを考慮しているということでございます。

(森野副委員長)

ちょっとお願いします。

今の中条と犀峡の関係であります、中条の子どもが犀峡高校には通わないという可能性が非常に高いということが数字で出ております。6 ページのところの中条中から中条高校へ4名行っておりますが、その他は22名の、「そうだ、中条へ行ってみる」ということはなく、地元に行かない。そしてなおかつ、今お話がありましたように沢が違うもので、犀峡には通えない。どうせ通うならば長野へ出ちゃう、それが実情なんです。

そうすれば、我々何を申し上げたいかというと、少しずれてしまうかもしれないけど、このただいまの議論ですが、ずれてしまうかもしれないけど、犀峡と中条をセットにして、そして0.5の人員配置で2高校を生かす方法はないかな、そんなふうに思っていますが、いずれにしろ筋違いということになったかと思いますが、ご了承ください。

(中村委員長)

また、議論の中で提案していただきたいと思います。

ほかにございますか。

(丸山委員)

今のお話の中で、資料をきちんと出したほうがいいと思うのは、中条、犀峡の地元の中学から、長野市内の高校へ行っているのは一緒くたになるより、どこに行っているかという数字もほしいと思います。というのは、私も中条高校にいましたが、私も通いましたが、ひとつやっぱり長野市の学校の配置が非常に偏在しています。

例えば例を出して悪いけれど、北部のほうだと割と行けるところが幾つかあると思うけれど、中条からどこへ行くのかなと考えたら、なかなかないのです。一番行きやすいところで、長野工業くらいだと思います。

あとはかなり苦労しているんじゃないかなと思います。実際どういうふうに行っているのかな。バス1本で行けるのは、どこですかというようなことも含めて、やっぱり中条の子たちは数は少ないとしても、犀峡にはバスの関係上行けないですよ。そうすると結局長野市内に行く。後で犀峡高校と中条高校の学校要覧を見れば分かるけど、今日は見てこなかったんです。この辺もやっぱり議論の場に出していくべきだと思います。

やっぱり長野へ行けるからいいんだということにはならない。かなり苦労して行くという感じがします。要望のような、質問のようなものです。

(中村委員長)

だんだんと議論になってきていると思いますが、質問はよろしいですか。

(森野副委員長)

ちょっと、付け足しで、丸山さんの意見に付け足しでお願いしたいのですが、中条高校の場合、まったくそのとおりだと思います。そうしてやはり住民の意思を聞くということです。

と言いますのは、中条のみなさんは非常に苦しんで高校をつくったりして、そして将来を考えている方たちが多いんですよ。と言いますのは、地元の高校から、それで将来子どもを見た場合に、たぶん専門学校とか大学へ進んだ、そうすると今から資金づくりをしなければいけないわけです。

地元には高校がない場合、地元に通わせてそしてその後に教育していくと、いうように、中条の人たちの考え方はなっていると思います。だから将来を見た子どもづくりというものを、地区ごとを見てやっているという、そういった村の現状を県教委さんは考えていたきたいかなと、こんなふうに思います。

(中村委員長)

ほかにありますか。

私のほうからひとつ、8 ページに商業科類型制、学校設定科目、という用語があるのですが、どのようなことなのか簡単に説明していただけますか。どこか資料はございますか。

(三澤教育支援主事)

学科、コース、類型、それと学校設定科目ですが、先ほどの説明の中では触れさせていただきましたが、もし学校要覧をお持ちでしたら、長野南高校のところを開いていただくと教育課程表というものがございまして、そこに記載があるかと思います。

長野南高校の学校要覧の 11 ページあたりに「13 教育課程」という表がございます。これから幾つか例を申し上げさせていただきます。

平成 16 年度、17 年度入学生適用、教育課程表というものがございまして、例えば「国語」という欄に、「国語表現」というところからずっと並んでおりますが、その横に「標準単位」という数字が出ております。その欄に数字がないところ、国語では「総合現代文」という科目があります。社会ですと「実践世界史」とか「実践日本史」という科目がございます。こういったものが「学校設定科目」の例でございます。

例えば志学館高校ですと、「ワイン醸造」という話が今までに出ていたと思いますが、その「ワイン醸造」という科目も学校独自に設定する科目、「学校設定科目」です。

それと学科につきましては、募集上当面工業科、商業科などの大学科という括りがあります。さらに、工業科などでは、電気科、機械科等の小学科という分け方もございます。

コース制・類型につきましては、科目の系統的な選択ができるようにしているものでございます。通常の選択科目は一定の範囲の中からそれぞれの科目を選択するわけですが、コース制は選択科目を系統的に積み上げられるように組み合わせ、進路や興味・関心などに合わせて選べるような工夫をしてあります。類型の場合ですと、この系統性のつなが

りがもう少し弱くなるということでご理解いただければよろしいかと思います。

（中村委員長）

ありがとうございました。

質問がなければ、候補案に対する詳細について資料をいただきましたので、その点からまた魅力づくりに絡めまして議論していきたいと思います。

前回まで総合学科、課題も含めてご議論いただいております。今回候補案について、詳細な資料をいただきまして、これに関してのどう考えるか、こういう理由が示されているけれども、ここはおかしいではないか、あるいはいいことではないか、両方の意見があると思いますがその辺から議論をスタートしていきたいと思います。

（中沢委員）

こういう推進委員会なもので、全体的な立場でお話ししなければならないのだということは、重々承知はしていますが、たまたま坂城町のただ1校の高校の転換というお話が出てきてしまっているもので、それを中心ということになりますと、9ページの多部制・単位制への転換、そしてまた今日のお話が多部制・単位制としてこれからやっていこうというお話であったもので、少し説明させていただきたいなと思います。

この資料の中で、なぜ坂城町が選ばれたかということ、工業の発展、あるいはしなの鉄道に近いというようなこと、この学校が地元高校としていろいろ苦しい中で財政を、組合立から県立へ、そして現状の中で育て上げたというのは、地域が本当に坂城高校を期待してのことだと思います。

今、坂城高校は160人いる中で、先ほどのお話ではないですが、42%の皆さんが地域から入ってくる。そしてまた上田からも入ってきていただいて、定数も比較的多かったよと。なおかつそれがもしなくなるとすると、上田・千曲市間24kmの中に普通高校がないじゃないか。この人たちを、なぜしなの鉄道に乗せてそちらのほうへ行かせなければいけないかということに、疑問を持つとともに、この40%なりの地元から高校へ入った人たちは、多分調べていただきますと、地元地域に帰って産業に従事するという割合は、一番高いじゃないか。

そういう面をもう少し見る必要があるし、そしてまた今、交通交通と申しますけれども、そうでなくて子どものニーズは都市化、多様化していく。そして都市へ進んでいくということでもあろうかなというならば、これはまず多部制・単位制の高校はやはり第1案として長野市内につくるべきことが当然だと、私は思っています。

そして第2案であるならば、それは須坂とか千曲市、普通高校もあり数校ある中に、そしてまた坂城のように工業もあり、なおかつ利便性がより高いということを考えると、この坂城の選択はちょっとおかしくないかなと思います。ここへきて初めて急に上田とのつながり、佐久とのつながり、この部分だけを広げて、そしてやはり地域というその場における論議をそいでいるなど、こんなふうに思っています。

そうしますと、長野あるいは須坂、千曲であるならば普通高校が2校ちゃんとあるのだから、そこを選択する努力をすべきで、坂城ということはいかがなものかなと。いろいろ

多部制・単位制の中の、ひとつの機能を持つということになれば、それはそれなりのことでもあるけれども、まず普通高校を坂城から転換させてしまうということは理が合わないし、この資料では説明不足だと、こんなことが第1点です。

そして私がこの前からお願いしているのは、今日の資料を見ると何か今まで「たたき台」だった、その言葉がいけないから「検討材料」だといって、またそれをより明確にするだけの資料であって、私がお願いしているのは、そうではなくて多部制・単位制ということ坂城に持ってきた過程の中で、例えば長野市とか千曲市、須坂市というように私の言うようなエリアのことが当然検討されているのですから、そういった面も合わせて教えていただかないと論議がおかしな方向に行ってしまうと、こんな思いもするわけでございます。

まず大筋としては、そういうことでございまして、合わせて坂城においては本当に各団体こそって今までの私たちのつくったこの学校を単によそへ行けということは、教育の問題ではないじゃないかと。もっと今まで地域の声を聞いて、この地域の、坂城高校だったら坂城高校をどういうふうに育てるということを、委員会でもいろいろ聞いていただいて、広く結論を出していただきたいということでもございますので、よろしくお願いします。

（中村委員長）

2点、ご提案いただいて多部制・単位制は長野市内のほうがいいのではないかとということと、複数校のある地域での転換が望ましいのではないかとのご意見でした。

例えば別の高校も検討されたというのは、事務局のほうでは説明いただけるものなのでしょうか。

ここに配布していただいた資料には、いろいろな理由が述べられていますが、当然議論の過程の結果だけととも見ることができます。

中沢委員のご要望は、議論の過程の説明をということですが。

（吉江高校教育課長）

申し上げますと、過程というお話がありましたが、県教育委員会としまして、幾つもの案の中で選んだというかたちではございませんので、そういうようなことでご理解いただきたいと思っていますし、また急に上田方面が出てきたというようなお話もございましたが、実は候補案の中の第2通学区の部分をご覧くださいますと、仮に坂城高校が多部制・単位制になった場合には、上田千曲と上田高校の統合が考えられるのではないかとというようなくだりは、6月24日に公表した時点から出ておりますので、そういう意味で申し上げますと私ども今回のこの候補案を考える場合には、そこら辺までのエリアを含めて連結関係があるというふうにご理解いただきたいと思います。

（中沢委員）

何か、皆さんのところでは出づらいことは、私も承知しておりますが、推進委員さんは県の教育委員会の皆さんのようにずっとそれを研究しているわけではなくて、資料の中で論議するのだから、その資料というものはより広いものの資料の提供の中で、「ああそう

か」ということになるだろうと思いますので、そういう場合には例えば報道関係、この前中野の市長さんが言うように、委員にこの部分だけは「限られた資料ですよ」というような提供の仕方もあるかと思うんです。

そうでないと、私たち素人が論議するには不十分な我々の論議になってしまうよという恐れがあります。

もうひとつ私が先ほどちょっと付け加えたのは、坂城の場合に本当に24 kmの中の真ん中の高校だと。そうすると生徒の80%が、上田の地域から集まってきていると。それにもかかわらず、その高校に通った子どもは、あと「全部しなの鉄道があるからこっちに乗りなさい」と、乱暴な言い方をすればそういうことであるので、地域に根差して地域で学ぶ、そしてまた地域の発展に返ってくるという、その仕組みをどう考えるかということを基本にお聞きしておきたいと思います。

(中村委員長)

それは、こちらで議論していくということによろしいでしょうか。

(中沢委員)

はい、それで。

そういう問題は、みんなの大きい問題ですから、すぐには決はとらなくてもいいのではないかと思います。

(中村委員長)

そういうことも念頭に置きながら議論を進めたいと思います。

(丸山委員)

今の坂城とのかかわりで、多部制・単位制の話になっているので、それについて意見を申し上げますが、私も今の中沢さんのおっしゃったことはよく分かります。ほかのこととの絡みでこの問題はあるので、そうすると定時制統廃合問題ですよ。これと絡んでいきますよね。

それはまた後で言いますが、例えば多部制・単位制が県教委の案のように非常にいいものであるということであるとして、その辺は私もちょっと疑問もないこともないんですが、それはそれとしているんなケースの状況を考えて、多部性・単位制の意味があるということでしたら、じゃあ、その通いやすいところというふうに坂城を出してあるのですけれども、実は多部性単位制にやっぱり行ったほうがいいなと思う子たちは私も今、活動をしている北信濃からは坂城は絶対とは言いませんが行くのはかなりきついですよ。そうすると北信濃のほうと須坂をどうか知りませんが、中野、飯山の子たちは多部制・単位制はもうあきらめるわけですよ。だから「定時制残したから、行くからいいじゃんか」というかもしれないけど、定時制とは意味が違うわけですよ。

そういう点でいったら、だから、私もどこに置くかというのは難しい問題が複雑ですけども、私もこの間、言いました。やっぱり一番の交通の便ということでいって、第1通学区となったら、やっぱり一番中心の長野市周辺のところにそれがいいとしたら、1つは

置くべきだという問題があると思う。そういうことはやっぱり考えていく必要がある。そのときに長野市内の中のいろんな定時制、通信制等があるのでそれをうまく配置するということは、中ではできないのかということを検討するしかないじゃないかということがひとつですね。

それからもうひとつは、それとの関連でやっぱり先ほどの普通科がなくなるという話は坂城もなくなり長野南もなくなるというのは、これはちょっとしっかり考え直すべきだと思うのです。やっぱり長野の南部地区に高校がないからということで長野南高つくったという経過があるわけでしょう。そういう歴史的経過があるわけですよ。住民の大運動の中でやっているわけですよ。先ほどどなたかおっしゃいましたが、長野市の南部地区というのはたぶん人口増加地帯だと思うのです。

今後状態がどういうふうになっていくのかという問題もあるので、やっぱりその辺の関連もあって坂城の多部性の問題というのは、やっぱり長野南の廃止の問題というのか、今後の問題ということも含めて考える問題。これはまた前の長野南がなかった時代と同じことになってしまう。もっと深刻になってしまう。そのところはやっぱり考えるべきだと思います。

やっぱり何となく、全体的に6つ減らさなきゃあというのでどっか考えたって感じがどうしてもするのですよ。そのところをやっぱりそういうもの全体にみんなバランスを含めてやっぱり議論をすべきだと思います。少なくともこの多部制・単位制でいうと北信濃の子どもたちは多部性・単位制には行けないと。行くには困難だということはあると思います。

（若麻績委員）

話がこんがらがっているように思えますが、第1通学区の中で一番南に位置するところに多部制・単位制高校を設置するという理由も含めていくと。それから坂城高校さんが数値的に見ますと、この3年間では増えてきているという、この地域高の中では規模を保ってきている学校ではあると、この資料から読み取れます。そういう中でその理解を押し付けるだけの理由となっているのかどうかということで、やはり若干の不安があります。

それからもう少し、「だからこうだと」という理由もあるのなら示してほしいし、例えば10ページが一番上にある地理的状况の中でも、長野 小諸間は1時間で移動できると。肯定的に書かれていますけれども、それは果たして肯定なのかどうかということも、我々に紹介していただければと思います。

（中村委員長）

今、地理的な問題等、出てきました。それから少し前の3回か4回の推進委員会のころには、少人数教育の問題について議論がありました。生徒と先生が親密に授業を展開していけることもメリットであるということがあったと思います。

(小山 (壽) 委員)

細かい資料を用意してもらえば用意してもらうほど、なかなか厳しいなあということを感じているのですが、私はこの資料を見ていくと実は21校よりもさらに校数は減ってしまうのではないだろうかと思わざるを得ないのです。

そういうような中で例えば今、旧第2通学区で全日制の学校が2つ減るということになりますよね。今の時点では、そのときに計画年次の問題があると思うのですね。例えば「19年に実施しますよ」ということを書いてありますけれども19年に実施できるところと、19年にはまだ実施せず計画は出すとしても、例えば5年後に実施します。6年後に実施しますというようなことが、恐らくそれぞれの個別ケースによってずれてくると思うのですが、その計画の進行によって第2段と言いますか、統合計画がまた出てくるんじゃないかというふうに思っているのですが、そこら辺についてはどういうふうにお考えなのか、私は知りたいなと思います。

(中村委員長)

では、事務局お願いします。

(吉江高校教育課長)

お願いします。

まず今、小山(壽)委員さんからもお話しございました件でご提案を申し上げたいということがございましたが、従来から私ども平成2年をピークに現在が60数%、3分の2以下でして、最終の31年は2分の1強程度まで落ち込むというようなことを申し上げております。それでご覧いただきますように76校というのは、実は平成2年から落ち込んだものを取りあえずならした上での数字ということで、さらに76校より少なくなるのではないかとということでございますが、今後の30、31年の落ち方を考えれば、今、お話しのございましたようなかたちになってくる可能性はあるかと思えます。

ただ、1点、私ども、現在平成19年度から実施というようなことについて、今、委員長のほうからスタートが切れるところが多少違ってくるんじゃないかというようなお話をちょうだいいたしました。現時点においては、私どもはまずは19年度から同時進行でスタートを切りたいというスタンスでいるということだけ、取りあえずは申し上げたいと思います。

ただ、今後の動向の中で今、ご指摘いただいたようなことはあるかどうかというのは実施計画発表の段階で検討することだと思っておりますので、現在においては19年度からスタートを切りたいということです。

それともう1点は、恐らくは動き始めてから今後の生徒数の減、おとといでございますが、ニュースでもやっておりましたが「日本におきまして、上半期の生まれてくるお子さんの数が、死亡者の数よりも小さくなった。」と。日本が2年ぐらい早く少子化に突入したのではないかなというような文言が入っておりましたけれども、そんなことを考えますとある時点でもう1回、いつこれがいいかということは必ずしも申し上げられませんが、再度の見直しせざるを得ない事態になるようなことは認識している次第でございます。

(中村委員長)

途中ですが、10分休憩をしたいと思います。11時2分までお願いします。

【休憩後再開】

(中村委員長)

それでは委員さんお集まりですので再開したいと思います。森野委員はご公務のため退席されましたので、ご承知おきいただきたいと思います。

やはり具体的な議論になってきますと、多少重苦しくなることは否めないと考えますが、やはり良いものを提案していくというスタンスで発言をいただきたいと思います。続きのところで、ご意見がありましたらお願いします。

(小山(壽)委員)

今、課長さんのほうから「19年に同時にスタートしたい」という話がありましたが、19年に同時にスタートをするというイメージがわいてこないのですね。計画を立てて生徒の減少の状況を見ながら、「この地域はこの年度」、「この地域はこの年度から」というふうに行くのではなくて同時スタートになると。

ちょっとそこら辺のことについて、もう少し説明をしていただきたいと思います。

(中村委員長)

事務局お願いします。

(吉江高校教育課長)

はい。

先ほども申し上げましたように私どものほうでは、まず19年度の募集に間に合うような形でスタートを切るということになりますから、そうした場合にそれぞれの学校の統合案が明らかになった段階で当然ながら、新たにそれぞれの地区ごとの募集定員というようなものも策定いたします。策定したうえでスタートを切るということで考えた場合に、現在全県的にこれは従来から申し上げていますように、平成19年度からスタート切りたいというような趣旨でございます。

しかしながら先ほども申し上げましたように、私どものそれぞれの推進委員会からどんなかたちの最終的なご報告をちょうだいして、それによって最終的に私どもの実施計画が、どういうかたちで確定されるのかというようなことにつきましては、委員の皆さんがご承知のように、まったく私どもは今現在ひとつのものを持っているということではありません。

そういうような意味合いからすると、実施計画の策定に当たってどういうかたちになってくるかという、今の段階で直ちに申し上げるようなものではありません。しかしながら今の私どもの基本的な県のスタンスで申し上げますと、19年からスタートしていきたいということで、ご理解をいただきたいと思います。

(中村委員長)

小山(壽)委員よろしいですか。

(小山(壽)委員)

幾つかの話の中で出てきているわけですが、中条にしても犀峽にしても、坂城にしてもそうですが、すべての高等学校というのは、当初は相当地域から提供してもらったりあるいは資金を提供してもらったりしてスタートをしているわけです。そういう意味では地域の学校に対する思いは、非常強いものがあると思います。

私はただ地域のそういう思いがあるにしても、今の高校生にいい教育を提供していく、そのためには一定の規模は必要であるということは、ずっとこれまでも言ってきたわけですが、しかし地域の方々もそういう学校に対する思いが、先ほどの一覧表で示されましたが、それぞれの地域からさまざまな要望書、意見書等が出されているわけです。

実際に実施していく段階では、それぞれの地域の方々の十分な理解を得て、スタートしていかなければいけないというふうに思います。

もうひとつは、校長の立場として考えますと、県が実施計画を立てれば、この実施計画を進めていく立場になるということです。ところが同時に地域の方々が、この実施計画に反対をしていけば、当然地域の方々を説得していく、理解を得ていく最前線に立たなくてはならないということになります。非常に苦しい立場にこれから立っていかうだろう。そういう意味で地域の方々に対する理解を、どういうふうに得ていくか。そういうことも合わせてお話をいただきたい。

(中村委員長)

今の意見に関しまして、事務局からコメントをいただければ。

(吉江高校教育課長)

基本的には、従来から私どものほうで申し上げますように、今回の私どもの実施計画を策定するに当たりまして、このようなかたちで委員さん方のご意見を活かしてというようなものを設けさせていただいて、そこである程度集約していただいた意見を、ベースに実施計画を策定するというスタンスに立っております。

そういうスタンスで考えた場合に、ある程度時間をかけて議論をいただいているということかもしれません。すべての方々のご理解をいただいて、それで実施という形に必ずしもならないという面もあるかと思います。

そんな中で、今後推進委員会の委員さん方からいただきました報告を受けて、実施計画から実施に移していく段階では、あらためていろいろな場面でのご説明等はそれぞれの地域では行われます。これは当然ながらさせていただいたうえに、実施に移していきたいということで、考えていただきたいと思います。

(清水委員)

この資料を拝見する限りでは、今までの生徒数の状況や流出入の状況あるいは、地域の状況をふまえた候補案というものができているということには理解できるのですが、果たしてそれだけでこういった候補案を出していいのかなというのが、私の疑問に思っていることです。

先ほどから、ご意見が出ていますように、それぞれの学校の事情ですとか地域の実態、また地域の方々や PTA、同窓会の意見等も含めその学校ができた経緯など、そういったものを踏まえた上でのものであってほしいというのが私の意見です。

どうも、大変失礼な言い方なのかもしれませんが、血の通っていないような決め方ではないのかなという感じがして仕方がないのです。

何回目かのこの委員会の席上、地域で説明がほしいということであれば説明をしますというお話があったのですが、一点聞きたいのは、そういったことが実際どのように行われたのかどうか。また今後今お話がありました、地域に説明するというお話なのですが、その辺のところをもう少し具体的にお願いします。

(中村委員長)

説明に行かれた例は過日に報告があったと思いますが、その後の経過について何かあればお願いします。

(吉江高校教育課長)

若干過日説明したことに重複してしまうかもしれませんが、私どものほうで伺わせていただいた所といたしますと、いわゆる飯田・下伊那地区、木曽地域、それから坂城関係、長野南関係、それと本日岳北の飯水の地域にもに行かせていただいています。

今後予定されているところで申し上げますと、また木曽地域には来るようにとお話をちょうだいしておりますので、恐らく間もなく私のほうでご意見をいただきにまいります。このようなかたちで、連絡をいただければ日程調整させていただいてお話をちょうだいたいと思います。

今、清水委員さんが言っておられましたが、私ども血も通っていないというお話もございますけれども、基本的に私どものほうでは、こういうようなデータに基づいて 89 校を県教育委員会として色分けしているわけでは当然ながらございません。ですからベースの中で全体的な流れの中で、判断していくということの中でこれはご用意しておりますので、ご理解ください。

(清水委員)

地域の方々に対するご説明とか、そういったものがあるのはわかりますが、できる範囲内でそのときの状況というか、皆さんのご反応、あるいはこういった質問があって、こういった回答があったかということもこの委員会で説明いただければと思います。

(中村委員長)

事務局のほうから、お答えいただければと思います。お願いします。

(吉江高校教育課長)

それぞれの地域に行きますと、例えば飯伊地域に行ったときに出たご意見は、飯伊地域には現在県立高校が8校あります。その8校をまずはじめに残すべきだという議論の中で、募集定員を調節することによって、学校を減らさないで対応できるというご意見をというかご質問をちょうだいいたしました。

それにつきましては私どものほうでは、募集定員を増やす、減らすということは、従来から私ども県教育委員会はやってきておりまして、それをやって来た中でもそろそろ立ち行かない状況になっているので、統合ということを含めての高校改革プランを立ち上げたというようなお話を申し上げました。

ほかの地域、単に飯伊に限らず出ておりますのが、ここの推進委員会にも出ておりますが例えば学級の規模を40人ではなくて、もう少し小さい規模にして対応できるのではというようなご意見もいただきました。

それにつきましては私が従来からお答えしていますように、40人というベースでこれは考えているとお答えをしました。あとは他の地域それぞれ確実に言えますのが、いわゆる統合ということ自体はよろしくない、すべて学校は残すべしというようなご意見をなべていただくということが現実にはございました。

(中村委員長)

地域のご意見も、ただ反対ではなくご提案されているということで、その部分はこの委員会でも参考にしていけると思います。

(丸山委員)

平成19年スタート、その意見だけ言っておきますけど、今、県教委が19年にスタートしたいというのは仕方ないけれど、現実には考えて県が出した案でいきますと、簡単な廃止ではないと逆に言うと思います。1校やめますというスタートできるかもしれません。

そうではなくて統合というと、例えば私はこれまで問題だと決まっているわけではないですが、私がいるところの中野と中野実業を総合学科にするというのですが、総合学科の2つの学校が統合することが、どれだけ大変なことが一般の方には分からないと思います。

例えば私は生活指導をしています、生活指導の決まりから始まって日常的な時間割から始まっているんな決まりがみんな学校によって独自なのです。それを全部想定して、学校、今度学校設ければ、教育課程もありますね。みんな両方の中たぶん委員を選んで、検討委員会を選んで検討して、統合した後どういう学校をつくっていくかということを検討をして、どういう学校で、このようにやりますということを、できた段階で、当然募集をかけるわけです。そのことができていないうちには募集はできないです。

そうすると19年度スタートということは、来年の今ごろできていなければいけないわけです。それは無理です。それは県教委でも分かっていると思うので、19年スタートと簡単に言いますが、それは現実問題として無理なのです。17年度の末に具体的案が県教委から出たとしてもとても無理です。数カ月であるいは1学期中に対象校が統合の案をつくって新しい学校の案をつくってということは無理なのです。

その辺も議論なわけで、高校が出るときにはどういうふうなことによって進めていくか、

慎重に検討していかないとそんな乱暴なことはできないと、分かりきっていると思うので、意見として言っておきます。

（清水委員）

この会の委員になって感じるのですが、審議すればするほど非常に難しいという感を日増しに感じているのが実状なのですが、同時に非常に責任も感じるわけです。当然そういう立場にあるということは分かっていますが、まず地域の方々がどのようなお考えを持っているか私はぜひ知りたいと思います。

そういった地域に出向かれて、県教委の方々が説明をされ、それに対する皆さんの反応ですとかご意見ですとか、そういったものをできる限り資料として挙げていただきたいなということです。

それを踏まえたうえで、この委員会を同時に進行していったほうがよろしいのではないかと思います。

いかがでしょう。

（中村委員長）

最初のころの推進委員会から、そういうご意見がありました。我々が地域のご意見を聞くことがどうかというご提案がございましたし、私は議論を進めながら、皆さん方が地域で得られた情報をここを紹介していただくということで、ある程度意見聴取をしているあるいは提案を皆さんでご検討をいただいているということではないかと思っております。

教育委員会のほうからも、陳情などがあったことについて説明をしていただいていると思います。もう少し突っ込んだところでしょうか、地域のご意見を聞くというのは。

（清水委員）

私だけかもしれませんが、地域の意見をどれだけ把握できるかという自信がないわけで、本当に限られた情報しか持っていないと思っております。従って皆さまはどうか分かりませんが、そういった資料があれば、ぜひ参考にしたいと思っている次第です。

（中村委員長）

そうですね。

引き続きそういう資料あるいは意見を聞くという立場をとりたいと思います。ただし地域のほうも、まず反対、それから白紙撤回ということが先行してしまして、先ほど中沢委員がおっしゃられていた地域で勉強をしていきたいということは時間がかかると思います。

その中から具体的なご提案というかたちで、候補案に対する意見が出てくると思います。長野市の教育委員会さんのはそういうかたちで、疑問点や提案も含めて、検討資料を出していただきました。まだ若干精査を要する点があると思いますが、そういうことで今後も増えていくのではないかと思います。

(中沢委員)

似たようなものなのですが、19年に向けてというお話ですが、私が先ほどお話をしましたように、勉強のために前橋の清陵あるいは太田市のフレックス高校へ行ってやる中でも、いろいろやる、実施にあたっては、目に見えているいろいろと努力をして、その2つとも反対がなくて、そして私どももそうすれば、「この道がいいのだ」と、選んだというくらいの論議が交わされたわけです。

今回の場合に、例えば先ほど地域の高校のほうで説明をしたその後は、全部私が出ましたけれども、坂城の場合にも突然多部制・単位制と、思わぬご提案がありましたので、いったいそれはどういうことかということで、学校関係、議会関係、いろんな皆さんに集まってもらって、高校教育課長さんのほうからご説明をいただきました。それは多部制・単位制は、こういうものだというだけのお話でございます。

その結果もうすでに町を挙げて、これは大変なことだと、地元高校がなくなってしまう。そしてまた地元の産業を興しているのは、長い年月坂城高校が培ったその成果ではないのかと。これが多部制・単位制に転換されてしまったら、地元はどういう関係になるのかということ等から、いろんな場面で連日論議され、今もいろいろと活動等もやっているようでございます。

その一段階として、まずこういうことについてはもう考えてほしいということで、発展する会からも要望があり、なおかつ子どもさんが本当に迷っています。自分たちの学校に、誇りを感じながら自分たちの学校は来年はどうなる。僕たちの学校へ来る人が、少ないのではないかという影響の大きさも出ているわけです。

そういう中で、今日提案された資料等については、即刻いろいろと皆さんにも後ほど見ていただくということでございましょうが、ある面には、例えば多部制あるいは総合学科、あるいは地域性というような幾つかの問題を絞ったところで、もし関係の学校なり、地元がこの会に説明したいということが出てきた場合には、ぜひそういう道を開いてほしいなとそのように思います。

(中村委員長)

地元の方が、ここの委員会で説明をするというのは構わないと思います。

どうでしょう、委員の皆様。平等な立場で、どこでも受け入れるということであれば可能と思いますが。

(小山(元)委員)

ひとつの例で、資料第2ページのところで、今日出していただいた再案について、ただいま説明をお聞きして拝見していると、だんだん狭まってきたなという気がします。

たたき台はいえ、これだけのものになってくると、非常に信ぴょう性が出てくるという立場になると思いますが、そこで最初の第1区のほうですがここで最初のところにある、飯水岳北と考えていきますと、本当に地域でご苦労されているわけです。いろいろ地域の人たちも、これからの将来につきましては、だいが理解してきております。これだけの少子化ですから、これは避けて通れない問題なのです。

ただ一番の問題は、あの地域にある、あの地域飯水岳北の地区で申しますと、3つあ

る普通高校が、一挙に1つになったということに、非常に寂しさを感じているわけです。あれだけの歴史を積み重ねながら育ててきた3つが、あるとき突然1つになる。これはどういうことなのか。それは地域の思いというのは一番強いわけです。

それぞれの集会のときに、これは飯山北高の校長先生の席に、私も出席していたから、これは校長さんのほうから、いろいろ詳しい事情を数字的に説明しながら、理解を求めているわけです。これは十分分かるんです。

しかし先ほど、小山（壽）委員さんが申しますように、一挙にそこへ持っていくのではなくて、ひとつの段階をもってできないか。または19年度ではなくても、時期を数年後ろへ持って行けますよね、そういうことができないのか。

最終的には、1つにならざるを得ないということ、地域住民は十分承知しています。だからどこまで持っていくのかという過程です。これはやはり大事に、地域の人たちが納得する方向で進めていただく。これは飯水岳北地区だけではなくて、長野県下全部、特に我々の担当では第1通学区ですが、そこで地域の方々と意見を大事にしながらそういう方向に進めているのが大事ではないかと思っております。

（坂口委員）

今、この実施時期の問題が出ておりますが、中学校としても非常に不安定な子どもたち、職員も職員会のほうでこのことについて大きく扱うということは、なかなかできていません。ですから先生方の声というのも、正確に把握していません。

今その19年同時スタートと、あるいは中沢委員さんから群馬県の話をしていただきましたが、義務と高校、現実とは違うのですが、例えば長野市の市街地3小学校の統廃合が今話題になっています。これはやっぱり、地域の皆さんの声を聞けば聞くほど決められない。

市は統合へ持っていきたいのだけれども、なかなかいかない。やっぱり教育という場においては、義務であっても高校であってもこれは同じような考え方を大事にしていかなければいけないとひとつ思ったりしています。

具体的に中条高校と犀峡高校の場合、両方の両地区の方をお呼びしても我々がお話を聞いて、どっちがどうなのか決められないのではないかと思います。数字ではたぶん出てくるのではないかと、信州新町のほうの生徒数の推移のほうが、中条あるいは小川村の生徒数よりはるかに平成31年は多いと思います。犀峡高校のほうが地元の出身者の割合が高いと数字でも出てきております。

これは長野市、先ほどより話題になっておりますが、教育長さん教育次長さん、私どものほうへもおいでいただいて資料をお渡ししながらお話をしていたわけですが、いずれにしる地域的な部分で、本当に地域連動が可能なのか、まずひとつ考えられないかということでご提案させていただきました。

もう1点、具体的に中条と犀峡のところでいろいろ入学者の状況等あるわけですが、私もかつてあるところでお世話になったときに、地域高校を抱える中学校の校長さんが正直その高校への進学数が非常に少ないと、その地域の町長さんからすごく批判をされて、中学校の進路指導はどうなっているのか、なぜ地域の高校へもっと生徒を送り込まないのかということらを常々言われたり、いろんなところで声を大にして言われ、非常につらいと。

なぜ生徒や親は、地域の自分の生まれたところではなく他のほうへ流れていく。やはり

ニーズとか魅力が有るとか無いとか簡単なものではなくて、将来の設計、進路に対して選んでいく、そういう中で自分の町にある高校には生徒は行かないだろう。親もそれを後押しして、ほかへ流れていくそういう世界があるということを、非常に辛そうにお話をされていたことがあります。

都市化というものは、ひとつの流れでやむを得ないわけですが、中条と犀峽どちらがどうなのかと言われたときに、我々にはある意味では非常に決められないのではないかと。土着性とか地域性という言葉がありますが、両方聞けば必ず両方に納得いく言い分があると思います。

しかし2つは、確かに無理だろうといったときに、最終決定をどこでやればいいのかというのは、非常に厳しいだろうと先ほどからこの委員の重さ、課せられた課題の大切さ、大変さというのがお話ありましたが、長野から中条あるいは犀峽へ行く子どもたち、例えば本校でも1、2名行きます。これは二次募集で行くような場合も多いわけです。

夢と希望と誇りを持って「よし」というよりは、長野市では受け入れてもらえなかったと、失敗したと。浪人するのはいやだということで、そういう状況も承知であるわけです。

そういった中で本当に、特色と魅力ということを掲げていただいている地域高校に、中学校としてもどう関わっていけばいいのか、どういう進路指導するのか、非常に大きな難しさを抱えております。

現状のようなこともお話をさせていただきました。来ていただいても聞いても、大変だなということを思います。

以上です。

(中村委員長)

そうですね。

確かに、個々の関係の方から意見を伺っても皆大切ですから、我々が重さを判断するのは難しいと思います。提案に関しては、判断ができると思うのです。その辺も含めてこの委員会では採り上げていきたいと思います。

(宮本委員)

結構中学校の立場とすれば、今の地域の要望、などについては難しいところがあるわけですが。あまり親からは、なかなかいつからスタートするのかという話しか話せなくて、具体的なことがなかなか私の耳でも、届きにくい現状なのです。

先ほど青木市長さんからも出たのですが、卒業生だとか高校の在校生からの意見がいろいろ出るわけですが、学校評議委員だとかいろんなそういう小学校、中学校これから高校に入る皆さんからも、もし意見があったらいろんなところで私たち自身も吸い上げていきたいなと思います。

それと今、坂口委員からも出ましたが、中学校から学校選択をするという少し難しく、例えば以前にも話をしましたが、今度のテスト、今月の末のテストで第2回目のもう新聞に載ります希望調査があるわけです。私たちの学校では来月の初めに調査をする予定であります。

その場合に前回お話をしましたが、現況でどの高校に行けるかと、子どもたちからも反

応があるわけなんです、あとは通えるか。本当のことを言うと魅力あるということで、どうしても遠くてもあの学校に行きたいという子どもが、ある程度何人かいるんです。

例えば小諸の音楽科だとか理数学科、そういう目標があるわけですが、なかなか高校側でも努力をされていると思うのですが行きにくくて、地域高校もありますし、上田市内にも勤めていたこともあるのですが、毎年上田市内の定員の発表がある時には、できるだけ「上田市内の定員を減らさないでくれ。」そうすると「地域高校の定員を減らせ」というようなことになってしまって、こちらの問題でどうしても自分では地元の高校に行きたいのだけれども、遠くへ行かなければいけないという現状がありまして、中学生にとっては複雑な、今回の学校の統廃合の問題かなと思うんですけど、先ほど言いましたように中学生の親から見て、子どもたちからの意見が入ってくればいいかなというのが少しと、現状としましては、どうしてもその高校に行かなければいけないというか、遠くへ行かなければならないという現実がありまして、例えば追加募集等を利用する場合など、「定員が空いているのはどこですか」と言われると地域高校だけで、「そこは行けない」というようなことで断念しなければいけない、あるいは私立高校へ行かないといけないというような現状がありまして、難しい問題があります。ぜひ、今の中学生の子どもたちの現状も把握していかなければいけないかなと思います。

（中沢委員）

いろいろお話しを地元ですていく中で、なぜ高校のことが、高校の当事者、あるいは地域に話がなくて、100年歩んできた、生きているその高校を転換することに対して、極めて不信感を持っているわけです。

そういう中で先ほど、いろいろ説明してもらえばもらうほど大変だということ、これは分かりますけれども、少なくともこの高校の改革視点の中でも、県民参加の高校づくりと言うことが挙げられていられるとすれば、地元の声を聞かずして資料で判断するということが、これは国家の問題ならともかくとして、地域に根差した高校づくりのうえに置いては、いろいろの面で調査、研究していくのもこの役割になってくるんだろうなと、こんなふうに思っております。

そしてまた坂城のお話になりますが、坂城の場合には地元の中学校から入ることが40%を超えている。定員も満たしているじゃないかと。そしてある程度の学力を持った人たちの中では、坂城高校へという希望が上田地域から増えてきていると、こういう実情もございますし、また地元高校と中高一貫教育、先ほど中学校のほうでは、その高校は、というよりも、坂城中学校などは特色があって、先生が一生懸命だから個性を伸ばすにはいい学校だよという、実態的な中高一貫の教育体系ができています。

また先ほども言いましたけれど、卒業生が工業を担いながら坂城へ帰ってくるという比率が極めて高い所だから、そういった過去の蓄積、この潜在力というか、そういった、そういうものをきっちり教えあって、それで新しいものをこうして、来る人たちだってそれはそうだと。地域には、そういう教育が大事なことは分かるけれど、直接そこに竹のところへ木を継いだようなことになっちゃうのではないかな。そこら辺の話はもっと地域に根差した、そういった選択をぜひお願いしたい。

合わせて勉強する中で、さっきの場合だったら、今、うちのほうのテクノセンターや企

業とのものづくりの教育を、ぜひ特化してやりたいということも、いろいろ模索してやり始めている矢先に、それが切られるということは大変なことでございます。

そういった面も深く考えていただきたいなと思います。

（中村委員長）

宮本委員、どうでしょうか。

（宮本委員）

先ほど小山（壽）委員から出た話ですが、19年度同時スタートということについて、もう少し説明していただきたいのです。例えばこの同時スタートを究極に言うと、しなければいけない理由とか、段階的な実施については何か問題点があるのか、地域の、あるいは周知を徹底するにはやはり少しずつ変わっていったほうが、いいことは、いいと思うんですけど、その辺の所の県教委のお考えをお聞きしたいのですが。

（中村委員長）

今、地域のご意見を聞きながら進めるにしても時間が足りない、それから改革プランがまとまってスタートするにしても、担当の個々の課題があるということで、その辺も含めて事務局から、説明していただけますか。

（吉江高校教育課長）

ちょっとご説明を申し上げる前に、よその県の例、これはよその県の例で長野県の場合は参考にならないとおっしゃられると思うのですが、ある県の例で申し上げまして、その年の冬に中高一貫校にこの学校は転換しますよという話が、地元が初めて知って、それが翌年度の募集で最終的に中高一貫校型ということで、翌年度というのは、例えば今年の冬に話があるものが、19年度の募集で中高一貫校が完成してしまうというような県がございます。

それで先ほど来、いろいろと統合というようなことでやるにあたっては、大変な面が、もちろんいろいろな作業があるということはございますが、それにつきましては私どもも、一生懸命やりたいと思っていますし、そこら辺についてはある程度の努力の中で何らかの対応ができるのではないかと考えています。

それはさておいて申し上げますと、私ども19年度にスタートを切りたいということは、第1回の推進委員会からずっと申し上げてきたことでして、その大きな趣旨は、19年からスタートしましても、19年度、20年度は在校生もいます。それで最終型になるのは21年度。それで例えばの話が、定時制の場合でいえばもう1年かかりますから、22年度というような形になります。

それを考えた場合にピーク時の平成2年からこれだけ落ちてきて、よその県がいろいろ対応してきている中で、長野県の場合にはスタートを切るのが、遅いとは申し上げませんが、スタートを切ってから、ある程度の完成型まで、ある程度の可能な限りのところでやっていきたいというスタンスで考えております。

それで今いただいている議論というのは、ある意味、先ほど来、私も申し上げているよ

うに、実施計画を策定するにあたって、どんな形になってくるかということで、若干はもちろん変わってくる要素はないとは感じてはおりません。しかしながら 19 というものを視野に入れるか入れないかというのは、今後この推進委員会の皆さま方の中で、いろいろな魅力ある高校づくりとか、統合の案とかというようなものをお決めいただいて、それからの議論ではないかと思います。

ですから、それがどんな案をお決めいただくか、それでその後、例えば報告をいただく段階において、ここについてはこうではないと、こういうような時期が望ましいのではないかとというようなご議論があるのかなというような見方をさせていただきます。

（宮本委員）

ちょっと分からなかったのですが、では具体的に言いますと、この推進委員会である程度段階に応じた魅力ある学校づくりのプランができさえすれば、時期を少しずつ段階的に落としていくことも可能だというようなことでよろしいのでしょうか。それともそれとは違うのでしょうか。

（中村委員長）

事務局お願いします。

（吉江高校教育課長）

具体的な提案を、どの程度いただけるかという議論になってくるかと思います。それで具体的な提案をいただいた中に、付帯事項的なこういうような記載があった場合に、私どもは最終的に実施計画を策定するにあたりましては、そういうことを考慮しながら計画を策定していくというスタンスになっておりまして、この時点での私どもにかせられた検討課題ということになると思います。

（中村委員長）

推進員会で、日程に関してもご提案いただきたいという趣旨ですか。

（吉江高校教育課長）

基本的には私どもは従来から申し上げておりますように、再編整備についての内容、それから魅力ある高校づくり、それから多部制・単位制、総合学科の配置等についてご提案いただく予定で考えています。

それを前提で考えておりますが、この学校についてこうしたほうがいいんじゃないかというような、仮に記載事項があるとすれば、それについてはご報告の中に盛りれたとして、それから先は私どものほうで、これをどうして実施計画に変えていくかというのは、私どもの検討課題になってきます。

(宮本委員)

例えば、総合学科をある程度、この委員で魅力ある学校づくりの1つとして考えられるということで、この地区に1つと、多部制・単位制としてある程度1つ、つくっていくというのは決まっていって、ではどこの高校にしようといったときに、地域の実情とか、生徒のニーズを考えながら、少しずつ、まず半分というか、初め幾つかは普通科を残しておいてやるとか、あるいは中高一貫校がいいならばそれに対するプランが上がるならば、それに対して統合のところがスケジュールとして短いものですから少し長くするとか、そのような仮の話ですけれども、そういうことが可能だということでしょうか。

(中村委員長)

いかがでしょうか。

(吉江高校教育課長)

私どもは先ほど来申し上げているように、現時点におきましていろいろなご質問に対しては繰り返しになって大変申し訳ないんですけど、あくまでも従来では17年度中に実施計画を策定して19年度から実施、具体的に再編という意味ですが、もし18年度から可能な事となれば、18年度から手を付けることもあろうかと思うのですが、それはさておいて、再編改変という意味で具体的には、19年度からスタートしていきたいというのがスタンスであるということを、現時点で繰り返させていただくしかないという気がしている状態です。

以上です。

(中村委員長)

これは極論になるのかもしれませんが、推進委員会で今ご提案の再編候補案について、これでいいというか、「対案が出ない」ということになれば、そのままの日程で実施はする。そこはよろしいですね。

例えばこの委員会で、日程的には一度に多部制・単位制を坂城高校に持っていくというのは、どうも地域の実情にもそぐわないし、どうなるか、先が不明な点が多い。多いのであればもう少し何か、段階を踏んで行う方法を取ったらいいのではないかな。その具体的な手順を我々推進委員会が示せるかどうかは別にして、そういう提案を候補案に対して付けて、ご報告させていただくとなった場合には、それは考慮して実施計画をつくられていくと、そういうふうに認識してよろしいですか。

(吉江高校教育課長)

基本的には、そういうような案を考慮してというようなことになろうかと思いますが、ただイメージ的に、ここが具体的にこうなるといようなことが、どの程度具体化した内容でいただけるかという議論になります。

(中村委員長)

具体性がかなり重要であるようなことがわかりました。

具体的なところの議論になかなか進めませんが、そこに行くベースについては、もう十分にご検討いただいています。まだ足りない点はあるかもしれませんが、いかがでしょうか。

(青木委員)

この推進委員会でのある程度の方向性を申し上げる時期が来たとして、手順どおりなのか、多少ずれがあるのか、そういうことは別として、予定どおり 19 年、新しい体制でスタートするときに、さっき丸山委員さんから「それは絶対無理だろう」というお話がありましたけれども、多部制・単位制、総合学科高校、これはどうしてもどこかの校地、校舎を利用するとしても、ハードの部分も手を加えなければ、19 年度 4 月からの新学校の開校ということにはならないのではないかという気がするのですが、それでも間に合ってしまうのですか。

(吉江高校教育課長)

この時期に候補案ということでご提案している内容で言うとなりますと、一部の施設の改修が必要な可能性はもちろんあるかと思いますが、大々的な改修までは必要ないのかなというイメージは持っております。

そんな中で例えば県立高校の場合にも生徒がいる中で大規模改修を実施したりという例はございますので、そういうようなかたちの中で、一部現在進行形的に、改修等が必要な場合があれば、そういうものが出てこようかと思っていますけれど、施設をいじるがために何年もかけざるを得ない、というような事態には必ずしもならないというような認識があります。

例えば、塩尻志学館高校は平成 12 年に開校いたしました。開校してから在校生がいる中で、施設整備も同時進行でやった経過もございます。そういうようなかたちの例もございますが、今後いろいろな形態で、総合学科で申し上げますと、どんな系列を入れるかによって施設のイメージが変わってきます。

ただ、その系列のイメージが決まった段階である程度シナリオが書ければ、そのものは、手は加えられると思います。

こういう意味も含めまして、私どもは最終的にこちらの推進委員会なりでちょうどいいしました内容を受けて、実施計画を策定する段階で、当然ながらいろいろ考えることが出てくるかと考えています。ただ現時点において問われれば 19 年度から実施していくというスタンスということでご理解いただきたいと思います。

(中村委員長)

青木委員、いかがでしょうか。

(青木委員)

今の段階ですと、「お手並み拝見」としか言いようがない。

(中村委員長)

日程的なことで議論が進んでいますが、それに関してありますか。ほかの項目でもよろしいですが。

(丸山委員)

日程的なこと、その次に言いますが、日程の問題だから、今事務局で答えてくれたような、そういうことだと思うんですね。だから要するに、内容に絡んで、魅力づくりの内容に絡んで、ここはこういうふうに、年次的にやったほうがいいよみたいなこととか、そういうことが出てくれば、それは付常事項に付けようとか、そういうふうに理解したほうがいいんじゃないかなと思います。

それからさっき、その前に出ていた地域の声をどういうふうに聞くかという問題は、大きい問題で、今日はもう時間がないので、次回にどういった対応をするか、部会の設置も含めてそろそろ検討したほうがいいかなと思っているんです。

というのは、地域の動きがかなり出ていますよね。飯山はかなり本格的に、飯山独自の、それこそ地域独自の、かなり各分野の人に集まってもらって検討が始まっているわけですね。中野、上田、坂城でも学習という面で始まったり、声が出てくる。そういうふうにいっぱい出てきていますよね。

そうなると地域の声を聞きながらというスタイルでしたら、部会というのはどういうふうに考えていくのか、この前委員長さんがおっしゃったように、この委員会でどの辺のところまで提案というか、こういうことについて議論してくれというようなことを提案できるかどうかということが、絡んでくると思うんですけれどね。ただ、丸投げでやるということは無理だろうしね。だからその辺を含めてそろそろ考えた方がいいと思います。

やはり部会をつくるべきところは全部というふうに必ずしもいえないかもしれませんがけれど、現実的に各部ごとに、4区ありますね。4区ごとに部会をちゃんとつくって、意見を聞くと、検討するべき点を検討してもらうということが必要ではないのかなと思うので、その辺は今日はもう時間がなくなっちゃったので、その辺の議論もやはり進めながら、この候補案についての議論が始まっているので、この辺の問題点とか課題も出ているので、あるいは対案的な方向性も少し出ているので、こんなことを議論しながら、どういうことを地域での、また部会や地域ごとに検討してもらうのかという方法も考えていく必要があるのではないかと思います。

(中村委員長)

今、私がここにメモをしておいたことを、丸山委員に言っていただきました。ずっと候補案の周囲からのアプローチが続いていたと思いますが、今日資料1の県立高校再編整備候補案について、事務局にご説明いただきました。これをよく委員さんは分析されて、納得できる点、反論のある点、それから一番はご提案、対案といいますか提案をいただきました。そういうことで議論を進めていきたいというふうに思います。

今日は説明を十分に聞いた、疑問点を質問をしたということで、若干の具体的ところの議論が始まりましたので、その辺を次回に進めていきたいと思います。

それから今、部会の設置を含めて地域の声をどう聞くのか、その辺も会の進め方として

検討するよにということですが、部会の設置というのは、ある目的を持って部会を設置するわけですが、推進委員会で地域の皆さんの意見や声を聞くというときには、やはり推進委員会に出てきていただいてご説明をいただく、ご提案いただくことが必要ではないかと思ひます。皆さん平等に意見を言える、皆さんというのは、地域の方、高校の関係の方、団体の関係の方が平等に意見を言えるという点ではそれが一番いいのではないかと思ひます。ある地域だけの部会で集中的に意見を聞いて、それをこの委員会で一方的に報告をするというのは、どうも機会としては均等ではない気がします。

それも含めてどうでしょうか。地域の意見の聞き方ということではいかがでしょうか。

(小山(壽)委員)

地域の意見を聞くということは、大事なことだと思ひますが、今何度も出てきましたけれども、推進委員会あての要望書、意見書を見れば地域はほとんど反対しているわけです。反対の声が大きくなってしまった。それは本当に声を聞いたことになるのかという問題がありますので、そこについてどういうふうに考えていったらいいのか。

それからそれぞれの、先ほど19年度同時スタートするんですかと聞いたのは、飯山は非常に取り組みが早いのです。平成11年、12年あたりのところで、高校の校長会は将来的に統合が必要であるということで議論がスタートしました。その当時の校長先生はみんな退職されました。

ただそれが、その次々に引き継がれた。高校の校長会が中学校に対するアンケートを、昨年度、一昨年度2年間、すでに実施しているんです。ただその当時は、中学の保護者たちも現実的に受け止めていないものですから、必ずしも十分なアンケートではない。今、こういうふうには県案がしっかり提示されたことによって、どうしたらいいんだろうかということが本格的に議論をされるようになったわけですが。これも飯山は取り組みが早いわけです。

中野は恐らく寝耳に水のような状態、坂城もそうだろうと思ひますが、当然どうしても取り組みは遅れ気味になってきます。でもやはりそれぞれ地域で実際に反対というだけでなく、そこは設置するとしたらどういうやり方があるのかということも含めて、私は議論を地域の方に提示するべきだと。だから今あるものをそのままの形で残してくれという話だけでは、高校改革は進まないだろうというふうに思ひます。

中沢委員さんだって、群馬県へ実際にこれだけ反対しながら、多部制・単位制高校を見に行っているわけです。見に行った上で、今日ああいうご意見をおっしゃられたと思ひます。やはり置くとしたらどういふことがあるのか、どういふ問題が出てきて、今度はその問題はどうかクリアしたらいいのかということが、やはり同時に議論された上で地域の声ということにならないと、ただ「今のまゐってくれ」、「反対だ」という声を聞いても仕方がないのではないかと、私はそういうふうには思ひます。

(中村委員長)

ありがとうございます。

議論するにはやはり反対だけではなくて、「ではどうしたらいいのか」という所をご提案いただくのが深く議論を進めるうえでの1ステップですし、ただ反対を申し述べられても

その意見をどう扱うのか、推進委員会の方としては反映しにくいと思います。

でもここにきてご意見をいただくのはよろしいですか。本当は我々が出掛けていって聞きするのが、坂城の町長さんのように情報収集に積極的に行くのがよろしいかと思いますが、それはとても、今上がっている候補案の学校に対してということにしかなく、あまりフェアなやり方というか、機会均等に意見を収集するということにならないような気がします。これは、どう周知したらいいか分かりませんが。

（小山（壽）委員）

次回、ちょっと話が出せたら、出そうかなと思います。

（中村委員長）

そうですね、分かりました。

そのようにご提案いただきましたので、この点もまた次回に進めさせていただきます。

今日はもう時間がまいりましたので、先ほど丸山委員に言っていたように、次回進めていきたいと思います。

何か特に進め方等ありますでしょうか。なかなか具体的なところに行くと、どうしてもとまどうということがありますが、そこはやはり、乗り越えないといけないと思います。

（中沢委員）

次回で結構なんですけれども、先ほど私が話した中で、坂城高校には24 kmの中でただ1つの普通高校で、その地域から80%くらいの皆さんがやってくる。地域に根差す高校だということで、みんながんばっているし、中学校もいろいろ応援していると。そういう所でありながら、その人たちは隣の千曲市へ行け、上田市へ行けということが、教育委員会の教育の原点であるのかどうか、その点は先ほど委員長さんも、教育にかかる話だから後ほどというけれど、次回そういった考え方を、より明確にしてほしいなと思います。

それと私が多部制・単位制は長野市のような大きい所、ついでに須坂市、あるいは千曲市というような複数の高校があるところを優先するべきじゃないか。子どもたちは、そういう都市へ今集まる傾向が強いんだよ、坂城がしなの鉄道だけであるからということだったら理由になりませんよ、ということを申し上げましたので、それに対する県の考え方、私が今までの中で腹案が幾つかあったでしょうと、それをお願いするのはどうも無理なようでございますので、砕けて設置そのものに対する私の疑問について、それは次回教育委員会で答えていただきたいと思います。

（中村委員長）

それと第5回の時に、福島県8校の総合学科高校について、資料をお願いしておりますがそれも宿題に残っておりますので、よろしくお願いいたします。

ほかになければ、次回の日程について、事務局からお願いします。

（三澤教育支援主事）

次回の日程につきまして、また後日、各委員さん方へ連絡させていただきますのでよろしくをお願いいたします。

（中村委員長）

それでは、これをもちまして第6回の推進委員会を終了させていただきます。
大変ありがとうございました。